

((注) 若干、加筆等訂正したところがあります。)

安野光雅先生の文化功労者ご受章、誠におめでとうございます。

また、今日は87歳のお誕生日であるとのこと、重ねて、心よりお祝い申し上げます。

県民の方々も、あの安野光雅先生が島根の津和野町のご出身と知り、この度のご受章を嬉しく、また誇りに思っておられます。

安野先生の、絵本や絵画などの分野でのご活躍とご功績については、先ほど下森津和野町長からご紹介のありましたとおりでありますので、私個人として、また知事としてのお話をさせていただきます。

私も安野先生の美しい絵が好きでひとりでありまして、私の子供たちが小さい頃、『あいうえおの本』や『ABCの本』などを買ってやったりしまして、子供たちも先生のファンであります。

知事として、安野先生との関わりが若干できましたのは、2年前の2011年(平成23年)、2月末から4月初めにかけて松江の県立美術館で開催された『安野光雅の絵本展』に関連してであります。

島根では少子高齢化が進んでおり、産業や観光を振興し、地域を活性化していくことが大切な課題であり、県外は勿論、県内でも、地域間で人・ものの交流が進むことが大事であります。

そうした交流は文化・芸術についても言えることでありまして、県内には、松江の県立美術館、益田のグラントワ、津和野には安野先生の美術館と、いろいろな美術館があります。

しかし、今朝、私はJRで松江から益田へ、益田からは自動車での会場へ来たのですが、三時間くらいかかるのであります。

島根は東西に長く、こうして津和野に先生の絵が沢山あっても、松江から見に行くのは大変であります。

そこで、県内の文化や芸術品自体の交流なども考えてはどうか、と県の関係部署に指示したことがあります。それによって県外からだけでなく、県内の地域間でも観光客の動きが出てきます。

松江の展覧会で安野先生の絵を見て感動した人は、さらにもっと多くの作品を見たいと、津和野の「安野光雅美術館」に来られることもあるでしょう。逆にまた、益田のグラントワで松江の県立美術館が所蔵している河井寛次郎などの民芸の陶器などを見て、松江でもっと見たいという人も出てくるでしょう。

そうした中で、『安野光雅の絵本展』も松江で開かれることになり、多くの人が見に来られました。

そしてその『絵本展』は、さらに県立美術館から長崎へ、そして愛知、横浜、福岡、東京、秋田へと、全国で巡回して開催されることとなり、そのための図録もできました。

その図録を今回、改めて見てきたのですが、安野先生はいろいろな人によって刺激を受けられ、それにより自分の行く道がひらけてきて随分ラッキーだった、『絵本展』はそうした幸運の足跡をたどるものとなっている、といった趣旨のことを言っておられます。

そして、先生が影響を受けられたふるさと津和野の先人、森鷗外が翻訳したアンデルセンの『即興詩人』のことについても触れておられます。

ちょうど2年前の今頃、県立美術館で安野先生の『絵本展』が開催されてい

た頃に、日本経済新聞で『私の履歴書』という著名人の方々の来歴をたどるシリーズがあり、たまたまでしょうが、安野先生のシリーズが二十数回に渡って連載されていました。

その中で、先生はやはり鷗外の『即興詩人』のことについて語っておられます。

それによりますと、若い時、安野先生は鷗外の作品を全部読もうと決意され、順次読んでいくうちに、二十代半ば頃（1950年代初め頃）に『即興詩人』を読む順番が来たのだそうです。

文語体による翻訳は難しく、読むのに時間がかかったが、鷗外の文語体の美しさが分かってきて、それに強く惹かれ、それから約50年たった2002年（平成14年）に、鷗外の『即興詩人』に口語訳の解説を付した『絵本 即興詩人』を作り、そして2010年に『口語訳 即興詩人』を作ることになったと言っておられます。

鷗外が翻訳したのが1902年（明治35年）で、それから約100年経って、ご自分の本ができたということであります。

このように、文化というものが、長い年月を経ながら郷土の先人から郷土の後輩に受け継がれていくものなのだなあ、と感じ入った次第であります。

そして今また、この安野先生の絵を見たり『絵本 即興詩人』を読んだりした子供たちや若者たちに、美しい芸術・文化を感じる心が受け継がれて行くのだと思います。

安野先生は、先ほど入場の際、87歳とは思えないしっかりとした足取りで入って来られました。誠にゴト壯健であられます。

今後も、津和野のため、島根のため、そして日本のため、ますますご健勝にてご活躍いただきますことを心よりご祈念申し上げまして、お祝いの言葉いたします。